

立正大学博物館 第1回特別展

立正大学が発掘した

埼玉の古代窯跡

会期：平成15年10月16日(木)～11月15日(土)



〈新沼瓦窯跡出土の瓦塔屋蓋〉

立正大学博物館

2003

特別展開催にあたって

立正大学博物館の第1回特別展として「立正大学が発掘した埼玉の古代窯跡」を開催することになりました。特別展は、立正大学の考古学研究の一つの柱として全国的に発掘調査を実施してまいりました「古代窯業の考古学的研究」の“埼玉県内の事例”の一端をご紹介する企てです。

それは古代窯跡の発掘調査によって操業時の一括遺物を把握することにより供給先との相関関係を究め、生産地と消費地との有機的な関連性を具体的に明らかにすると共に年代の特定を試みることを目的とした研究でありました。

この調査・研究は、昭和30年度の前半から昭和50年度の中頃にかけて、文部省の科学研究費・識者の委託などを得て実施いたしました。北は青森県から南は福岡県にわたり、とくに東日本を中心に調査を進めました。その結果、古代における窯業の実態をあきらかにするうえに大きな役割を果たすことができたと思います。発掘調査の結果については、その都度、日本考古学協会の春と秋の総会・大会において速報し、また、月刊『古代文化』『考古学ジャーナル』などに報告してきました。そのなかで発掘資料が整理された遺例については、報告書として刊行してまいりました。しかし、20余年にわたって実施してきました発掘調査の結果については諸般の事情からまだすべてを公けにすることなく過ぎてきました。その間、日本の考古学界は、古代の生産問題に視点をおく研究が進展し、いまや全国的に多くの研究者によってその調査と研究が日常的に進められるようになってきました。

この度の特別展は、古代窯業生産の考古学的調査が考古学界でまだ一般的に行われていない段階で、立正大学の考古学が取り組んだ結果について、とくに埼玉県の事例をご紹介することにいたしました。

それぞれの発掘調査にあたって種々ご協力を願いました関係各位に改めて御礼申し上げる次第であります。また、あわせてこれらの発掘調査に参加し、共に汗を流した当時の学生諸君の労に対しても感謝と敬意を表したいと思ひます。

平成15年10月

立正大学博物館

館長 坂詰 秀一

南比企より東金子へ

坂詰 秀一

I

昭和6年に刊行された『埼玉県史』の第2巻を頼りに、比企郡の亀井・菅谷・玉川村に存在する古代の窯跡群を訪ねたのは昭和32年の初夏の頃であった。

稲村坦元氏を中心に編まれた『埼玉県史』第2巻は、当時、全国的に刊行されつつあった多くの県史のなかでも学問的な水準の高さを誇示するものとして最右翼の出版物であった。したがって同書中の「県内における窯跡」項もその頃の考古学界の研究動向を反映したものであったが、それは反映というよりも学界をリードするかのごとき内容を有するもの、として注目を受けたのであった。

亀井村の窯跡群は、古く慶応年間(1865~68)にその存在が知られ、明治36年には武蔵国分寺の瓦窯跡として学界に紹介された(『古蹟』2-2)。一方、玉川村の須恵器窯跡については、明治38年に大野雲外氏によって発見が報じられていた(『東京人類学会雑誌』20-228)。

このように亀井村を中心として存在とする古代の窯跡群は考古学界においても有数の遺跡として一部の識者間に知られていたが、その実態は必ずしも明瞭ではなかった。

私をその窯跡群の踏査に駆り立てたのは、奈良時代より平安時代にかけての須恵器の形態的特徴を国分寺瓦とのセット関係より把握したい、との欲求にもとづくものであった。

昭和30年代の初頭、私は古代の墳墓に興味を持ち、その火葬骨収納の須恵器資料などを集成したいと考え各地に関係資料を訪ね歩いていた。その折、管見に入った壺形の須恵器の器形はかなりバラエティに富んでおり、形態的に時代差を示すものであろう、との見通しを得たのである。しかし、その時代比定のメルクマークとなる形態研究は未開拓であった。

そこで須恵器と国分寺瓦を同時焼成している窯跡を調査することによって基準を得たい、と考えたのである。

II

亀井村の窯跡群を踏査した私は、その規模の大きさと資料の豊富さに魅せられた。そこでこの窯跡群の調査を是非とも実施したい、との念願をもつにいたった。また、この踏査行で亀井小学校を訪れた折、かつて同校の訓導であった小鷹建吾氏の『亀井窯跡群につきて』と題する私家版の研究書の存在を知った。この小鷹氏の研究については従来知られていなかったものであり、後に、目次を添えて学界に紹介したが、亀井村を中心とする「南比企窯跡群」調査の先覚者として顕彰されるべきであろう。

亀井村を中心とし、菅谷・玉川村に広がるこの窯跡群は、かねてより「亀井窯跡群」と呼ばれてきたが、南比企の丘陵全域にわたって存在することが知られたので、私は「南比企窯跡群」として理解することにした。

南比企窯跡群は、その中心地一旧亀井村一に新沼・金沢・天沼を中核とする武蔵国分寺の創建瓦の生産窯、それに接して虫草山・宮ノ前などのほぼ同時期の須恵器生産窯、そして、さらに丘陵西方に将軍沢・亀ノ原などの須恵器生産窯跡が存在している。

私は、まず奈良時代須恵器の編年の基準を求めべく西方の亀ノ原窯跡群と新沼瓦窯跡を発掘した。ここでは、とくに新沼窯跡から武蔵国21郡中の16郡の郡名瓦を得て、国分寺創建時の瓦献進の一斑を知ることが出来たが、伴出須恵器の資料が必ずしも良好ではなかった。よって新沼出土の須恵器資料と同一の特徴をもつ須恵器を焼成している虫草山そして宮ノ前の窯跡を発掘した。これらの窯跡発掘は、大学の休暇を利用した10日間ほどの発掘であり、窯跡も1遺跡2基の検出を目標にした小規模調査であった。

当時、窯跡を同一地域において継続的に発掘調査する、と云う方法はほとんど実施されていなかった。よって調査の規模は小であっても、その調査結果は、須恵器編年の基準となるであろう、との視

点より細々と続けたのであった。発掘の結果は、その都度、日本考古学協会の総・大会の折に報告してきた。

III

南比企窯跡群の調査と並行して実施したのは、人間郡の東金子窯跡群である。

東金子窯跡群についても『埼玉県史』第2巻に触れられていたが、その後、本窯跡群の性格研究に力を注がれたのは、内藤政恒・宇野信四郎両氏である。

東金子窯跡群に関して、とくに私が注目したのは、武蔵国分寺の塔跡出土の文様瓦と同範瓦がこの地より出土するという事実であった。それは、恰も『続日本後紀』の承和12(845)年3月23日条に見える「武蔵国言、国分寺七層塔一基、以去承和二年為神火所焼、于今構立也、前男衾郡大領外従八位上壬生吉志福正申云、奉為聖朝欲造彼塔、望請言上、殊蒙处分者、依請許之、」と対応すべきものではあるまいかと考えたからである。

南比企窯跡群において国分寺創建期の須恵器形態の一端を認識することができたが、この東金子窯跡群においては、それに続く平安時代の須恵器認定がとくに文献資料との関係において捉えられる可能性があろう、と考えたのである。

東金子窯跡群の調査はこのような見通しにたって着手したのであった。調査は、昭和38年に実施した新久窯跡に端を発し、以降、機会を得ては、谷津池・八坂前窯跡などの発掘に及んだ。

その結果、東金子窯跡群中の新久・八坂前両窯跡は、国分寺再建塔の瓦を生産していたことが知られ、それと同時に焼成されていた須恵器の認識により、一つの編年の基準を得ることが出来たのである。それは、昭和40年に実施した八坂前窯跡の発掘において具体的資料を得た後、昭和44年の新久窯跡、同55年の八坂前窯跡第2次発掘の結果を検討して確認されるにいたったのである。

IV

南比企の窯跡群の調査より発した私のささやかな須恵器の編年の研究の目論見は、東金子の窯跡群の調査に行きついて漸くにして端緒を得たのである。そこで昭和55年に一つの論文を書いた。「窯跡出土資料による関東地方須恵器の編年」(『立正大学人文科学研究年報』第17号)がそれである。この小論は、関東地方の全域を対象にしたものではあったが、年代的基準は新久・八坂前の資料であり、それを除外しては編年の基礎を失するものであった。

昭和30年代のはじめに南比企窯跡群の一角に立ってから早くも20数年が経過した。その間、窯跡に対する学界の評価は大きく前進し、窯跡出土資料による須恵器の編年の研究は、古墳時代～古代の考古学的研究の支柱になっている。往時を想起すればまことに隔世の感が強い。

埼玉県においても新しい息吹が感じられる。古墳時代の須恵器窯跡の発見と新久・八坂前窯跡に後続する須恵器窯跡の検出は、まさにそれを象徴的に示すものであると云えよう。それは須恵器生産の段階的な性格の変容を通して出土遺跡の歴史的な位置づけを果たすことが可能となってくるからである。

窯跡の調査研究は、それを群集の相において把握することが肝要であり、窯のみでなく、工房・集落・墳墓との有機的関連性をも考えることが必要であろう、との意見をかつて述べたことがあるが、現在においてもその基本的視角は変わっていない。否、ますますその感を深めているのが近頃の心境である。

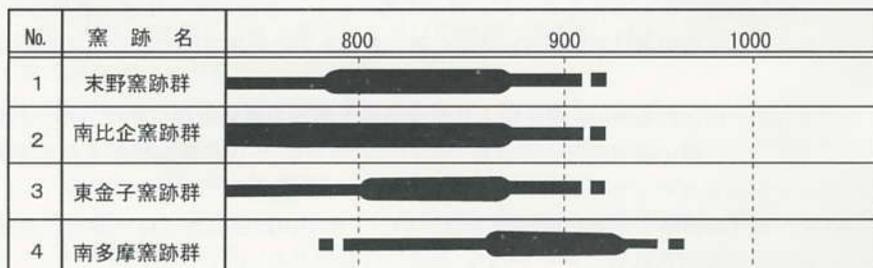
それにつけても思い出されるのは、南比企より東金子へと歩みを進めた折、常にご教示と激励を惜しむことなく与えられた柳田敏司氏と金井塚良一氏のことである。両氏の側面援助を得て不敏な私も牛歩を進めることが出来たのであり改めて感謝の念をもっている。

ここに完成をみた『新編埼玉県史』資料編3は、かつて私が指針とした『埼玉県史』第2巻と同様に、いやそれ以上に活用されることであろう。

(『新編埼玉県史』資料編3 奈良・平安「新編埼玉県史だより」昭和59年3月より転載)



第1図 武蔵国四大窯跡群位置図



第2図 武蔵国四大窯跡群消長図

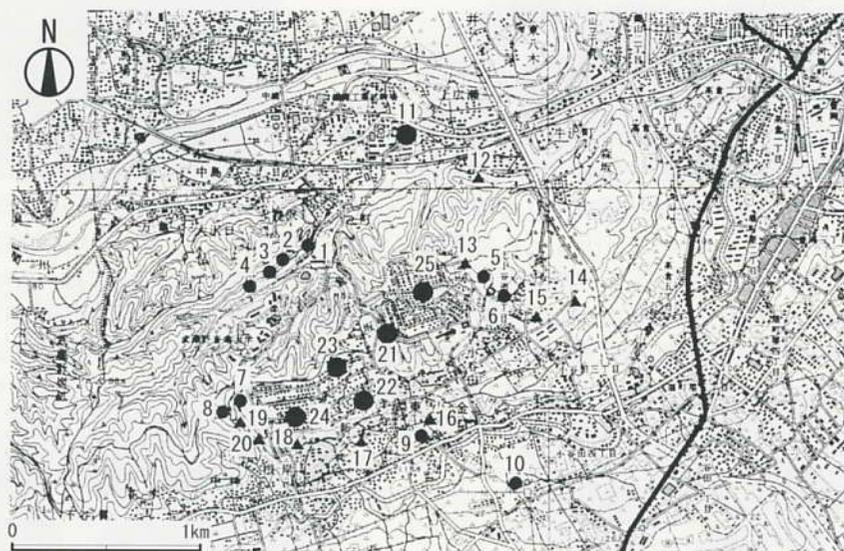
(『東国の須恵器』古代生産史研究会 平成9年より一部改変)



- | | | |
|--------------|----------|-------------|
| 1: 篩新田遺跡 | 2: 亀ノ原窯跡 | 3: 日野原窯跡 |
| 4: 将軍沢第6支群窯跡 | 5: 鶴巻窯跡 | 6: 将軍沢2B2窯跡 |
| 7: 鳩山窯跡群 | | |

第3図 南比企窯跡群の分布

(玉川村教育委員会編『篩新田遺跡Ⅰ』平成4年より一部改変)



- | | | |
|-----------|-------------|----------|
| 9: 水排窯跡 | 22新久窯跡A地点 | ● 既調査地点 |
| 10: 谷窪窯跡 | 23新久窯跡C・D地点 | ● 未調査地点 |
| 11: 前内出窯跡 | 24新久窯跡E地点 | ▲ 遺物分布地点 |
| 21: 八坂前窯跡 | 25谷津池窯跡 | |

第4図 東金子窯跡群の分布(昭和38年頃の状況)

(坂詰秀一編『八坂前』雄山閣出版 昭和59年より一部改変)

南比企窯跡群

(1) 亀ノ原窯跡（昭和32年～34年調査）

亀ノ原窯跡は、玉川村に所在する。調査は、3次にわたり行われた。第1次調査は、灰原の発掘より着手し第1・2号窯跡を、第2次調査は第3・4・5・6号窯跡を発掘した。第3次調査は、残存部分の調査を目的として行われた。窯構造は半地下式無段登窯で、出土遺物としては、多量の須恵器と瓦が検出された。その後、平成に入って玉川村教育委員会により再度発掘調査が行われ、武蔵国分寺（東京都国分寺市）・寺内廃寺（江南町）出土の瓦當と同形の瓦が検出され、供給先が明らかにされた。

このような経過を経て、亀ノ原窯跡は平成13年3月16日付で埼玉県指定史跡として指定された。



第5図 亀ノ原第1・2・4・5号窯跡全景

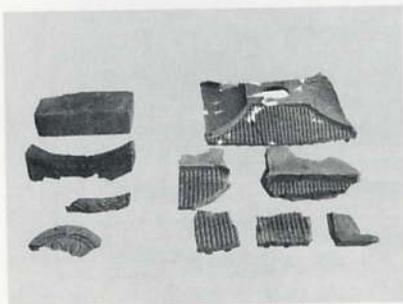


第6図 亀ノ原窯跡出土須恵器

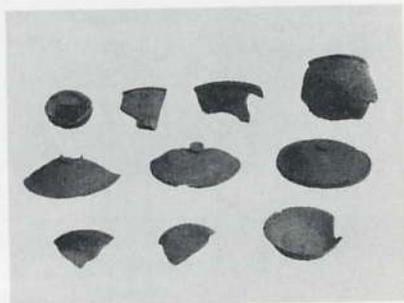
(2) 新沼窯跡（昭和34年調査）

新沼窯跡は、旧亀井村の窯跡の中心的な存在で江戸時代から知られていた。東南方約2kmの地点には亀ノ原窯跡が存在する。窯跡は、大別すると2つのグループよりなる。調査は、A群（仮称）で地下式無段登窯構造を呈する瓦窯跡を2基検出し、未発掘1基を加え、A群は計3基で構成されていることが明らかにされた。

発掘された2基からは、鏡瓦（八葉蓮華文）・宇瓦（扁行唐草文）・男瓦・女瓦・瓦塔・埴・須恵器が出土している。出土した文字瓦（人名・郡名等）は、古くから武蔵国分寺出土の文字瓦と同一であることが指摘されており、そのうち郡名瓦については、「秩父」・「那珂」・「男衾」など、武蔵国20郡中（後に置かれた新座郡を含まず）16郡の郡名が確認され、武蔵国分寺の献進瓦を本窯において主体的に焼成していたことが明らかになった。



第7図 新沼窯跡出土瓦と瓦塔



第8図 新沼窯跡出土須恵器

(3) 能瀬ヶ沢窯跡 (昭和 32 年調査)

能瀬ヶ沢窯跡は、新沼窯跡に隣接して存在していた。その大部分は畑地のため破壊されていたが、窯跡 1 基を調査した。窯跡は遺存状況が悪く、煙出部・焼成部の一部を検出したのみである。構造は、全容は不明であるが、半地下式無段登窯と考えられる。出土した遺物は、須恵器坏を主体とするが、全体的に出土量は少ない。

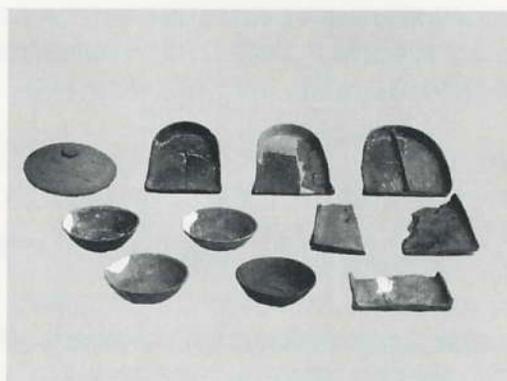
(4) 鶴巻 (将軍沢) 窯跡 (昭和 34 年調査)

鶴巻窯跡は、菅谷村、現在の嵐山町に所在する。調査は、早稲田〈大川〉・立正〈坂詰〉両大学考古学研究室の共同作業によって行われた。鶴巻窯跡は、A・B・Cの3グループよりなっており、そのすべてにわたって発掘を実施し、計 10 基の半地下式無段登窯を検出した。

出土遺物は、C群より多量の風字硯が出土しており、注目される。須恵器は、各グループとも坏を主体とし、若干の壺・甕の類を焼成していた。



第 9 図 鶴巻 A-1 号窯跡全景



第 10 図 鶴巻窯跡出土須恵器と風字硯

(5) 虫草山窯跡 (昭和 35・45 年調査)

虫草山窯跡は、鳩山町に所在する。調査は、2 次にわたり実施され、第 1 次調査では半地下式無段登窯を 2 基発掘した。出土遺物は、第 1 号窯では若干の瓦・瓦塔が検出されているが、主体は須恵器坏であった。第 2 号窯からは、須恵器の完形に近いものが多く出土している。特に第 2 号窯では、片口鉢や挿鉢が出土し注目される。

第 2 次調査では、第 3～8 号窯の調査を行った (3 基を完掘、半欠 2 基を調査、1 基の存在を確認)。この結果虫草山窯跡は、第 1 次と合わせて 8 基以上より構成される窯跡であることが確認された。これらの窯跡は、限定された空間に築窯されたため、重複状況が認められ、3 期にわたる操業が想定された。

出土遺物は、第 1 次調査と同様に須恵器が主体であり、坏・高坏・壺・甕・挿鉢・瓦塔・円面硯などが出土している。



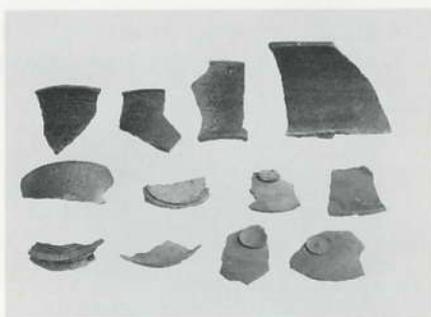
第11図 虫草山窯跡全景



第12図 虫草山窯跡出土須恵器

(6) 山田(赤沼)窯跡(昭和35年調査)

山田窯跡は、鳩山町赤沼に所在する。調査の結果、A・B・Cの3グループよりなっていることが判明した。本調査では、そのA・C両グループの各1基を発掘した。A1号窯跡は登窯で、煙突部の内部より、四重孤文字瓦2点、窯中より坏・壺形須恵器の破片が若干検出された。C1号窯跡も登窯で、窯中より坏・壺形須恵器片を検出した。



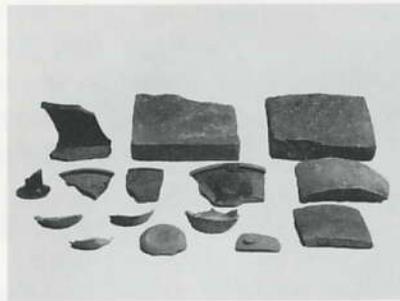
第13図 山田(赤沼)窯跡出土須恵器

(7) 奥田(宮ノ前)窯跡(昭和36年調査)

宮ノ前窯跡は、鳩山町に所在する。窯跡は、東南面する傾斜地の裾付近で2基確認された。構造は、第1号窯跡は地下式無段登窯、第2号窯跡は半地下式登窯である。第1号窯跡の出土遺物は、須恵器が主体をなし、坏・蓋・壺の類が比較的等比率でもって検出された。他に、若干の瓦片が認められるが、主として窯底に接して平らに検出されているため、焼台と思われる。第2号窯跡の出土遺物は、須恵器のみであり、瓦片の存在は認められなかった。須恵器の形態は、第1号窯跡のものと同様である。特に第1号窯跡の灰原からは、大形埴と多量の瓦片が出土し注目される。



第14図 奥田(宮ノ前)第1号窯跡



第15図 奥田(宮ノ前)窯跡出土須恵器と磚

東金子窯跡群

(1) 新久窯跡・八瀬里工房跡（昭和38・44年）

新久窯跡は、入間市新久に位置し、周辺には水排（みずおし）、八坂前、柿ノ木、谷津池、谷窪窯跡群が所在している。窯跡は、加治丘陵の南縁に位置しており、丘陵の北縁には西より東に流れる入間川が、南縁には西南より東北に流れる霞川が見られ、この丘陵には、仏子（ぶっし）粘土層と呼ばれる良質な白色粘土層が見られる。

本窯跡は、2次にわたり調査が行われた。調査は、第1・2次あわせてA～Eの5地点にわたった。検出された遺構は、A地点からは瓦窯跡、B地点からは工房跡、C・D地点からは須恵器窯跡、E地点からは瓦窯跡およびそれに付属する集積場、そして竪穴式住居跡である。窯の構造は、半地下式無階無段登窯が主体であり、地下式無階無段登窯がD地点より1基検出されている。

出土遺物は、全地点から多量の須恵器・瓦が出土した。須恵器の中では、坏の底部近くの外面に「入間」と笥書されたものが出土しており、郡名として把握することが可能である。A・D地点から陶硯が出土したとあわせて、本窯は官窯であったと推定されている。また出土した瓦は、武蔵国分寺（東京都国分寺市）出土瓦との比較研究から、供給先が武蔵国分寺であることが明らかにされている。

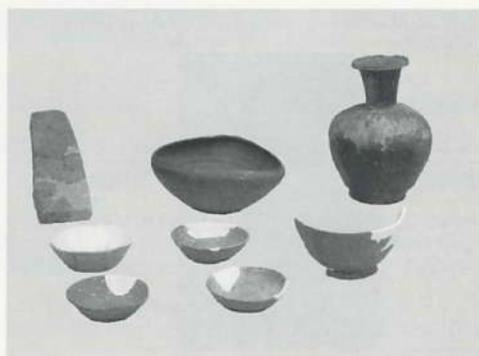
瓦の分析からは、本窯の製品が武蔵国分寺の創建期のものとは考えられず、『続日本後紀』承和12（845）年3月に見られる、国分寺塔再建と密接な関係が想起されている。つまり、本窯は周辺に位置する八坂前窯跡と合わせ、国分寺再建塔のために造瓦の発注を受け、生産が開始されたものと考えられる。

このことは、一緒に焼かれていた須恵器にも承和12（845）年という、一つの上限年代を与えることになり、関東地方における須恵器編年研究上、重要な年代基準の資料となった。また、出土した文字瓦の中に多数の郡名、郷名が認められたことから、塔再建は条文にみえる前男衾郡大領壬生吉志福正、彼一人の力によるものでなく、武蔵国分寺全体より広く協力を得て実施されたことが推察されている。

八瀬里工房跡は、新久窯跡の調査に入る段階で偶然発見された工房跡であり、近接して八瀬里窯跡が確認されている。工房跡は、平面正方形を呈し、出土遺物は須恵器の歪品がかなり多く検出されている。



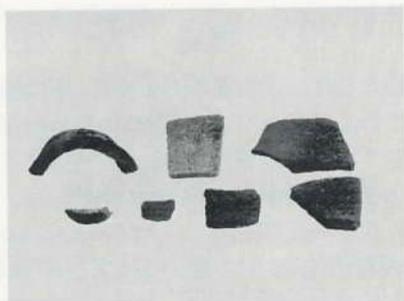
第16図 新久窯跡出土須恵器と瓦



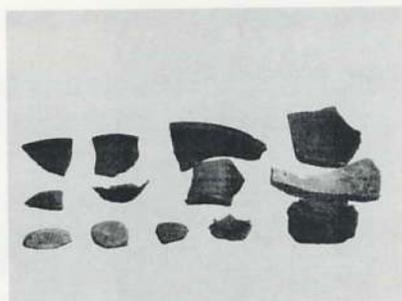
第17図 八瀬里工房跡出土須恵器等

(2) 谷津池窯跡・谷津池工房跡（昭和 38・41 年）

谷津池窯跡は、入間市に所在する。本窯跡は、谷津池北側・南斜面のA地点と東側・南東斜面のB地点に分かれて存在しており、前者からは地下式無段登窯2基と工房跡、後者からは地下式無段登窯2基と竪穴状遺構が発見された。A地点の工房跡は、長方形を呈する竪穴式で、長辺 6.0m、短辺 2.6mを測る。長辺の北壁には、完形の女瓦を伏せた排水施設が検出され、床面には部分的な粘土集積も認められた。またB地点の竪穴状遺構の床面からは、歪んだ須恵器・瓦や粘土塊等が発見された。これらの遺構は、出土遺物よりA地点は造瓦関係、B地点は須恵器生産に関するものであると考えられ、特にA地点の工房跡出土の文字瓦は、武蔵国分寺跡出土の文字瓦と同様のものであり注目される。



第 18 図 谷津池第 2 号窯跡出土須恵器



第 19 図 谷津池第 3 号窯跡出土須恵器

(3) 八坂前窯跡（昭和 40・55 年）

八坂前窯跡は、入間市に所在し、近接する新久窯跡と共に、『続日本後紀』承和 12 (845) 年の武蔵国分寺塔再建期の供給瓦窯として知られている。調査は、2 次 に わ た り 実 施 さ れ、第 1 次 調 査 で は 3 基 の 窯 跡 (第 1・2・3 号 窯) が、第 2 次 調 査 で も 新 た に 3 基 (第 4・5・6 号 窯) の 窯 跡 が 検 出 さ れ た。窯 の 構 造 は、第 3・4・6 号 窯 が 地 下 式 無 階 無 段 登 窯、第 1・2・5 号 窯 が 半 地 下 式 無 階 無 段 登 窯 で あ っ た。

出土遺物は、多量の坏・埴・皿・蓋・鉢・盤・水瓶・壺・甕・硯などの須恵器と、鏡瓦・宇瓦・男瓦・女瓦などの瓦類が出土した。特に鏡瓦と宇瓦は、武蔵国分寺出土のものと同範のものが多く、良好な資料を提供している。



第 20 図 八坂前第 2 号窯跡



第 21 図 八坂前窯跡出土鏡瓦

立正大学が発掘した埼玉の古代窯跡関係文献一覧

A, 南比企窯跡群

遺 跡 名	調査年	市町村	文 献
亀ノ原窯跡 (第1次) 亀ノ原窯跡 (第2次) 亀ノ原窯跡 (第3次)	昭和32年 昭和33年 昭和34年	玉川村	<ul style="list-style-type: none"> ・久保常晴「武蔵比企丘陵窯業関係遺跡調査概報」I (『日本考古学協会第26回総会発表要旨』昭和35年5月) ・久保常晴・高野正人・坂詰秀一「埼玉県南比企丘陵における窯業関係遺跡の基礎的研究(1)」(『立正大学史学会創立35周年記念史学論文集』昭和35年10月)、後に立正大学考古学研究室小報第1『南比企窯業遺跡群—その基礎的研究(1)—』(小川書店 昭和36年4月)に収録 ・坂詰秀一「東国における須恵器の生産とその歴史的背景についての予察」(『立正大学文学部論叢』第19号 昭和39年6月) ・坂詰秀一『埼玉県指定史跡亀ノ原窯跡群とその時代』(玉川村教育委員会 平成14年3月)
新沼窯跡	昭和34年	鳩山町	<ul style="list-style-type: none"> ・久保常晴・坂詰秀一「武蔵比企丘陵窯業関係遺跡調査概報」II (『日本考古学協会第27回総会研究発表要旨』 昭和36年4月)
能瀬ヶ沢窯跡	昭和34年	鳩山町	<ul style="list-style-type: none"> ・坂詰秀一「東国における須恵器の生産とその歴史的背景についての予察」(『立正大学文学部論叢』第19号 昭和39年)
鶴巻(将軍沢)窯跡(早稲田大学との共同調査)	昭和34年	嵐山町	<ul style="list-style-type: none"> ・坂詰秀一「東国における須恵器の生産とその歴史的背景についての予察」(『立正大学文学部論叢』第19号 昭和39年)
虫草山窯跡 (第1次) 虫草山窯跡 (第2次)	昭和35年 昭和45年	鳩山町	<ul style="list-style-type: none"> ・坂詰秀一「東国における須恵器の生産とその歴史的背景についての予察」(『立正大学文学部論叢』第19号 昭和39年) ・坂詰秀一「埼玉県虫草山窯跡の調査」(『考古学ジャーナル』第49号 昭和45年10月) ・坂詰秀一『武蔵・虫草山窯跡』(埼玉県鳩山山村教育委員会、昭和52年3月)
山田(赤沼)窯跡	昭和35年	鳩山町	<ul style="list-style-type: none"> ・久保常晴・坂詰秀一「武蔵比企丘陵窯業関係遺跡調査概報」III (『日本考古学協会昭和39年度大会研究発表要旨』 昭和36年10月)
奥田(宮ノ前)窯跡	昭和36年	鳩山町	<ul style="list-style-type: none"> ・坂詰秀一「東国における須恵器の生産とその歴史的背景についての予察」(『立正大学文学部論叢』第19号 昭和39年6月)
			<ul style="list-style-type: none"> ・坂詰秀一「埼玉県西部丘陵窯業関係遺跡の調査」(1) (『古代文化』第3巻10号 昭和34年10月) ・坂詰秀一「埼玉県西部丘陵窯業関係遺跡の調査」(2) (『古代文化』第4巻1号 昭和35年1月) ・坂詰秀一「埼玉県西部丘陵窯業関係遺跡の調査」(3) (『古代文化』第4巻5号 昭和35年5月) ・坂詰秀一「埼玉県西部丘陵窯業関係遺跡の調査」(4) (『古代文化』第6巻2号 昭和36年2月)

B, 東金子窯跡群

遺 跡 名	調査年	市町村	文 献
新久窯跡 (第1次) 八瀬里工房跡 新久窯跡 (第2次)	昭和38年 昭和44年	人間市	<ul style="list-style-type: none"> ・坂詰秀一「須恵器の製作所跡について」(『日本考古学協会昭和38年度大会研究発表要旨』昭和38年10月) ・坂詰秀一「埼玉県人間郡東金子窯跡の研究」(『台地研究』第15号 昭和39年2月) ・坂詰秀一「埼玉県新久窯跡群の調査」(『考古学ジャーナル』第36号 昭和44年9月) ・坂詰秀一編『武蔵・新久窯跡』(雄山閣出版 昭和46年) ・坂詰秀一「埼玉県新久窯跡」(『日本考古学年報』第21・22・23号 昭和56年4月)
谷津池窯跡 (第1次) 谷津池窯跡 (第2次)	昭和38年 昭和41年	人間市	<ul style="list-style-type: none"> ・坂詰秀一「埼玉県人間郡東金子窯跡の研究」(『台地研究』第15号 昭和39年2月) ・坂詰秀一「東国における須恵器の生産とその歴史的背景についての予察」(『立正大学文学部論叢』第19号 昭和39年6月) ・坂詰秀一「新発見の瓦の工房跡」(『考古学ジャーナル』第1号、昭和41年10月) ・坂詰秀一「埼玉県人間郡東金子における瓦窯跡と工房跡の調査」(『日本考古学協会昭和41年度大会発表要旨』昭和41年10月) ・坂詰秀一「埼玉県人間郡谷津池瓦窯跡」(『日本考古学年報』第19号 昭和46年4月)
八坂前窯跡 (第1次) 八坂前窯跡 (第2次)	昭和40年 昭和55年	人間市	<ul style="list-style-type: none"> ・坂詰秀一「埼玉県人間郡東金子瓦窯跡の調査」(『日本考古学協会昭和40年度大会研究発表要旨』昭和40年10月) ・坂詰秀一「埼玉県人間郡八坂前瓦窯跡」(『日本考古学年報』第18号 昭和41年4月) ・坂詰秀一「埼玉県八坂前瓦窯跡の調査」(『武蔵野』第48巻1号 昭和43年4月) ・坂詰秀一・小林昭彦「埼玉県八坂前窯跡の第2次調査」(『考古学ジャーナル』第188号 昭和56年4月) ・坂詰秀一「埼玉県八坂前窯跡」(『日本考古学年報』第33号 昭和58年3月) ・坂詰秀一編『八坂前』(立正大学文学部考古学研究室報告 第2冊 雄山閣出版 昭和59年4月)

立正大学が発掘した埼玉の古代窯跡発掘調査年表

年 代	発 掘 調 査 遺 跡 名
昭和30年	<p>亀ノ原窯跡(玉川村) 昭和32年～昭和34年</p>
	<p>能瀬ヶ沢窯跡(鳩山町) 昭和34年 新沼窯跡(鳩山町) 昭和34年 鶴巻(將軍沢)窯跡(嵐山町) 昭和34年</p>
昭和35年	<p>虫草山窯跡第1次(鳩山町) 昭和35年 山田(赤沼)窯跡(鳩山町) 昭和35年</p> <p>奥田(宮ノ前)窯跡(鳩山町) 昭和36年</p>
	<p>新久窯跡第1次・ 八瀬里工房跡(入間市) 昭和38年 谷津池窯跡第1次(入間市) 昭和38年</p>
昭和40年	<p>八坂前窯跡第1次(入間市) 昭和40年  </p> <p>谷津池窯跡第2次(入間市) 昭和41年</p>
	<p>新久窯跡第2次・(入間市) 昭和44年 八坂前第1号窯跡 新久A-1号窯跡</p>
昭和45年	<p>虫草山窯跡第2次(鳩山町) 昭和45年</p>
昭和50年	<p></p> <p>虫草山窯跡全景</p>
昭和55年	<p>八坂前窯跡第2次(入間市) 昭和55年</p>

記念講演会

期日；10月18日（土）

会場；立正大学熊谷校舎1号館 1102教室

時間；13:30～15:30

演題

- ①「立正大学が発掘した埼玉の古代窯跡」
坂詰 秀一（立正大学博物館館長）
- ②「埼玉県における立正大学古代窯跡調査の意味」
柳田 敏司（埼玉県文化財保護審議会会長）

パネルディスカッション

「埼玉県における古代窯跡調査の回顧と現状」

柳田 敏司・渡辺 一（鳩山町教育委員会）・

坂詰 秀一

[司会] 上野 恵司（立正大学博物館）

会期 平成15年10月16(木)～11月15日(土)

編集・発行 立正大学博物館

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL:048-536-6150 FAX:048-536-6170

E-MAIL:museum@ris.ac.jp

(東プリ)

